
カインによろしく！

柿者ししまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カインによるしく！

【Nコード】

N5841C

【作者名】

柿者ししまる

【あらすじ】

人は産まれ、生きて死ぬまで様々な事を思い動く……。カインと名乗る死神を生業とする悪魔がいる……。そもそも死神ではなかった彼はなぜ死神をしているのか……。死神として人と接する彼は何を思い動くのか……。その答えを探すように彼は今日も死神の生業を為す……。胸元に輝きを称えながら……。

第一章 命の足跡・・・ってトコかな？（前書き）

第一章はほとんど世界観解説みたいなものです。

これからストーリー出していくんでよろしくお願いします。

第一章 命の足跡・・・ってトコかな？

不自然な光景・・・雑踏の交差する町並みは地表から離れることなく人々はわらわらと

行き交う。その地表から離れた中空で佇む男・・・足元に見える雑踏を眺めながら、

静かに語り始めた・・・。

生命の歴史・・・それは原点を辿れば宇宙の誕生にまで戻らなければならぬ。

無から宇宙が生まれ、星々が生まれては消え、また生まれては消える中、

一つの星の中に生命が生まれる。それはとても脆く弱い存在だったが、

まるで何かに突き動かされるように繰り返す生まれ、次第、次第に生命を増やしていった・・・。

すると生命に変化が起こる。それは姿形のみならず、生存領域までも広げ、

その種を増やしてゆく・・・進化、繁栄、衰退を繰り返す、いつしか生命は、

人類にまで登りつめる。

しかし完全に星の環境に適応し、種族、民族として生きる人類は、物質的な進化を自ら止める結果を生んでしまう。

だが人類は、もっと別の、全く異なる次元に進化の道を見つけた・・・。

精神・・・心である・・・。

人類、いや、人間は、生まれ、生きて、死ぬまでに、様々な事を考え、動き、思ってきた。

そして、そこから文明が興り、文化が生まれ、そして・・・【宗教】ができた。

人間は、様々な時代に、様々な民族の中で、様々な伝説や宗教等の心の世界を創ってきた。

目的も多岐に亘り、純粋な信仰、民族の統率、権威の誇示・・・良し悪し、大小を問わず、

数多く生み出されてきた。その影響力は凄まじく、主に、民族から国家へと人間たちが、

その集団の呼称を変えてから・・・ヒドくなってくる。

異民族、異国の宗教を邪教として侵略の口実にしたり、互いに認め合えても、似かよった

神がいると、ランクづけしたり、悪くすりゃあ悪魔に貶めたりする。コロツコロ変えられちゃあ神様だったままのモンじゃない。

あゝ・・・なんかハラあ立ってきた！

もうかしこまった喋り方も飽きたし、前置きはこんなもんだろ。

とまあ、そういった宗教、神話等の思想、概念が俺たち悪魔や天使、神といった、

「生命なき命ある世界」を創った。そこは善悪を問わず、大まかに総称して【魔界】と呼ばれている。

さて、それじゃあ自己紹介といくか！俺の名はカイン。勘の良いヤツや、聖書を読んだ

事のあるヤツなら、ピンツときたろう。【カインとアベル】の兄弟の話。弟のアベルに、

間違った嫉妬心を抱いて弟を殺しちゃう。っていう話の中の、兄のカインというのが俺、

らしい。「らしい」っつーのは、俺自身、そんな事（存在原因）何も知らないし、

関係ないっての！聖書のカインは聖書のイメージ。俺はそのイメー

ジから創られた存在。

まあ、関係があるかないかっていうと、無い事は無いんだけど、ま、そこは

いろいろある訳よ。そんなカイン君は『死神』をバイトでやってる『悪魔』だ。

通常、俺達のような人間の精神によって創られた魔界で生（？）を受けた者達は、

さっきの聖書の件のように、何かしらの形で存在原因があり、そこから人間たちの

善悪の物差しによって、魔物が天使かに分けられ、さらに時代、年月を経て、

性格付け、位置づけされ、もっと言えば種族分けまでされる。そんな中、俺は悪魔に

位置づけされている。まあ、弟を殺しちゃうんじゃない。

悪魔つてのは魔界でもポピュラーな種族の一つで、主に理知的で狡猾、最終利益を

重点的に考え、一を実行するにも、第二、第三と手段を用意するほどずる賢い。

と言われている。ヒデエ言われようだよ。俺はそうでもないんだけどなあ……。

とにかくそんな悪魔名俺だが、今は死神をやっている。元々、悪魔や天使（以降、

悪魔、天使含めて、細かくない限り、魔物と表記）は、種族分けされたあたり（時代）から

固定化され始め、現在になってはもう、変動し得ないほど凝り固まっていた。

それは種族も同じで、異種族間での移動（異動？）ができないのが原則となっている。

が、たまに、俺のような例外がある。ある、とは言っても、俺自身が死神になった訳でなく、

バイト感覚でやらせてもらっている。つてとこかな？

まあ、俺たちみたいな魔物なんてのは、魔界にいただけでとり立ててやる事も無いし、

それに比べれば遥かに面白いし、退屈しない。何より、合法的に外（人間の世界。以降、

人界、人間界と表記）に出られるのが魅力だ。

合法っていうのは、実は天界、魔界、ひいては神界。総じて一つの「法律」がある。

『天魔法典』と呼ばれており、神、天使、悪魔、全てに定められた法律だ。

その中にはいろいろな宗教、神話などからの神々ならではの固定観念や、独特の宗教観を

網羅しながらも、共通点、妥協点から、天界、魔界、神界に及ぶ決まりごとを定めたものだ。

具体的には「天界、魔界、及び人間界は本来行き来ができない。」

「神界は神々が住む場所で、そこに行けるのは天界の、それも限られた上位天使だけ。」等、

その世界間、世界の内外に対して定められたものがほとんどである。魔界も含めて定められたこの『天魔法典』。じゃあ、悪魔達は守っているのか？と思うかも

しれないが、案の定、守るわけがない。というより、理解できてるヤツ、少ないだろうな。

・・・なんか話が脱線するが、ここいらで天界と魔界の世界の特徴を話しよう。

基本的に思われているイメージは、天界は「天使の住む良い世界。魔界はその逆。

それが普通だよな。だがこの世界観（？）では宗教や神話などの概念が混同し合い、

矛盾点や相違点を『天魔法典』によって定められた世界である。ということ覚えておいて欲しい。

まず天界は、天使の住む世界だが、そこにはそれぞれの宗教から生まれた天使達が、

それぞれの世界を形成し、互に関係し合う事もなく、それぞれの信仰に基づいた世界を

創っているのだ。さらに言えば、それぞれの信仰に基づいた天界であるということとは、

その宗教の信徒には加護と祝福を与えるが、それ以外の人間には、たとえ悪人でなくとも、

邪な者とし、排除する。といった、博愛の面と、冷徹な面を併せ持っている。といった感じが。

まあそれぞれの宗教で若干の誤差はあるが、一様に言えるのは自分たちの信仰以外は全て、

邪と決め付けてしまう。ということだ。『天魔法典』ができてから、というか、ある程度

時代が進んでからは、少しユルくなったのか、天界間でも交流を持つとうという動きがあるが、

・・・ムリっばいだろうな・・・天界だし・・・とまあ、これが天界の特徴だ。

一方魔界は、その逆、というと味気ないので、説明すると、一言で言うとゴツチャゴチャ。

もっと言ってしまうと「混沌」としている。ということだ。魔界は人間の心の闇。

悪の部分が集まってできた世界。といってもいい程、そのまんまの世界だ。

無秩序で定まりがなく、欲望と本能のままの世界・・・とは、魔界の中でも大部分の事で、

中には俺のような理性のある者達もいるし、もつとすごいのだってゴロツゴロいる！

つまりは魔界ってのは「自由」ということだ。その分混沌としているがそれが全てだ。

だからその分、そこで生きるために力も要求される。きっとそこからだろうな、魔界が

弱肉強食のイメージもあるのは、ともあれそんな魔界だが、『天魔法典』は理性ある悪魔

（魔神）たちによって仕切られ理解できてないヤツらもその中で動くため十分機能してる

といえる訳だ。

さて、最後に俺の仕事に関してのことを教えよう。死神ってのは本来は死神としての

存在理由のある者だけができることだが、俺みたいな例外もある。

その例外だって

俺だけではなく一時的にヒマそうな悪魔（一定の基準はある）を手が欲しいときに

使うこともある。「神」とついてはいるが基本はそんなタイソウなもんじゃない。

あえて神を挙げるなら死神の世界である冥界を統べる、我らがボスのハーデス様くらいだ。

あ！あとその嫁さんか。まあその人らの事は後でおいおいイジるとして、用は死神ってのは

魔界にいるような悪魔とそんなに変わらない、という事だ。しかし、決定的な違いは、

死神は特有の仕事があり、そのためには人間界に行く必要があるの

で、死神は魔界の中でも、

数少ない【人間界への移動】を合法的に許可された種族（仕事）である、ということだ！

だからといって死神は特別！死神はエリート！という訳ではない、

が・・・
やっぱ調子に乗りたくなるよな！
ともかく長々と離れたが合法的っていうのはこういう事だ。あー疲れた。

さて、と、そろそろ飽きたな。仕事について話したいが、ま、そりゃこれからの

俺を見てれば解るだろう。それじゃな！

カインと名乗ったその男は、手軽く挨拶するように、片手を挙げた途端、黒板の文字が

消える様にその姿は風景に染み込んで消えていった……。もうなんの痕跡も残っていない

その中空を、雑踏か何かの拍子で二羽のカラスが飛び去ってゆく……。。

第一章 命の足跡・・・ってトコかな？（後書き）

この作品は、今から5年前くらいに書いた自己小説を最近発掘しましてw w

どうせなら誰かに見てもらおうと思い、ココに掲載させていただきたく投稿しました。

結構長い話になりそうですんで続くか解らないけど、ガンバります！

カインという男・・・そして（前書き）

もう少し世界説明が続きます。

でもゆっくりと進行して行きますんで
よろしく願います。

カインという男・・・そして

先ほど「カイン」と名乗った男の周囲の空間は、空気から変わっていた。

そこは重く、暗い闇の中、点々と直線状に灯る松明の灯だけが、そこを唯一歩くカインを時折照らしている。

廊下であるうそこを無言で歩くカイン。足音がしないその足元は、足元から下が見えず、雲のような、煙のような、ドライアイスのようなものが敷き詰められている。

カインはただただ歩いている。松明の灯を過ぎる度、カインの姿が見えてくる。

高い身長、髪は長く束ねている。ホリの深い顔立ちに太い首筋、首の根元からピチットとした

タイトのようなものを着ているのか、肌色から突然黒くなっている。コートなのか、コート調の服なのか、革製のような光沢を持ったその上着は、襟が立ち、

胸元は全開、みぞおち下からボタンが留められている。そこから除く胸板は鍛え込まれたように

線が浮き出ている。体の中心線上の、みぞおちから3cm程上に、乳白色の、掌よりも

少し小さめの水晶のような形状のアクセサリーが見える。ネックレスにも見えるし、

シャツの装飾にも見えるが、よく見ると、シャツの上から胸板に埋め込まれているのが解る。

コートの腰のベルトはキッチリ締められており、右のほうに小さめの、ベルト取り付け型のポシェットが付いている。そのベルトの背中側、髪が邪魔で解りづ

らいが、ベルトの中に細く長い、硬い物体が浮き出ているのが見える。それらも後々、この男を見ていれば明らかになるのだろう。そしてそのカインのデニム地の黒いズボンの足は、廊下の突き当たり、大きな扉の前で止まった。

カインの目の前には、重厚な格調ある観音開きの大きな扉。その上には魔界の文字なのだろう。人には読めない文字で【主任室】と記されている。右手で扉を押すカイン。うす暗い廊下。手に力が入ると、一筋の光の糸が垂れる。その糸が徐々に太くなり、体が入る幅になった所でカインはその体を滑り込ませた。手が離れ廊下を照らす光の柱は、ゆっくりと細くなり、「ガコオン」重い音が低く、しかし太く響き、響き終えた廊下は再び沈黙を取り戻した。

カインの足は止まらない。扉の中に入ったカインは左に見える机に歩いていった。部屋にはこの部屋の主人たる【主任】と思われる人物が一人、扉の対面にある窓から外を見ながらグラスをかたむけている。カインは扉から三十歩ほど歩いて机にたどり着く。見上げるカイン。なぜなら机台までカインの頭上、10m上にあるからである。垂直に浮き上がるカイン。そのまま机台に立つと振り返り、机台の端に足をブラつかせる様に座る。主任室は広い。一つの球場並の広さが多少横長になったような造りをしている。

カインが入ってきた扉、その上に交差に組まれた大鎌が二本飾られている。

その大きさ、長さは双方若干の違いはあるものの、短い方でも柄はカインの二倍、

刃はカインより少し長いくらいの長さがある。しかも、留めてあるのは魔力なのだろう。

物質的な歯止めやフックといった物は見えない。天井はその交差した鎌の頂点から少し

上のところで雲がかっている。先ほどの廊下の天井も、暗くてよく見えなかったが

同様なものかもしれない。ちなみに主任室には床があり、大理石調の石が敷き詰められている。

さて主任がいる扉の対面側の窓、実は壁一面が窓になっており、上下段六面ずつの、十二枚の

窓でできている。上段は左から一つ置きに、下段の窓と、くい違わせながら上下三枚ずつの

窓にはステンドグラスが施されている。その絵は魔界を象徴しており、人間の火あぶり、

串刺し、引き裂きや、悪魔の群れ等、おぞましくも息を飲むほどの迫力を持った絵が

施されている。中には人物画もあるがその脇に魔界の文字でハーデスと書かれてあり、

どうやら冥王を描いていると思われる。主任はその下段にあるハーデスのステンドグラスの

横の透明窓から外を見ながらまだグラスを傾けている。グラスには赤い液体が見える。

さほど残ってはいない。主任のしているその外は、よほどの上空にあるのかどんなに下を

見ても地表は見えず、彼方には地平線すら見えない。所々に見える雲のようなものの切れ端が

上空を思わせる一因になっている。その空の色は魔界だから太陽などないはずなのに、

全体的に何故か夕焼けのように赤く、時折窓に、雲もなく雨が打ち付けるらしい。

さて、その外を見ていた主任がグラスの中身を飲み干してようやく向きを変える。

グラスを持つ左手を横に伸ばしグラスを置くような仕草をしてその手に力が消える。

白く細い左手はグラスから離れ、体によるとともに消えた。消えたように見えたが被っている

ロープに隠れただけだ。グラスはその中空に留まっていたがまもなく振り返った主任の後方、

机側の対面の壁、同じ様なグラスが並べられている台にゆっくりと下がってゆく。グラスは

その台に近づきながら逆さまになり、グラスの内側についていた液体の跡が完全に消えた後、

そのグラスの台に静かに止まった。その台の横には少し離れた位置で、何故か滝が流れている。

滝の飛沫がグラスにかからない絶妙な距離だ。天井から下へと流れ、滝は床に開けられている

穴に流れ落ちている。その壁はグラス台とその滝しかない。しかもその滝に流れる液体は赤い。

血のような赤さをもった液体、魔界であるため血を連想するが真偽は定かではない。

主任の飲んでいた液体はこれのようだ。主任はゆっくりカインに、いや、机に近づいている。

カインは後ろに手をつき足をブラつかせ、さもふてぶてしい態度で待っている。近づく主任、

カインがちょこんと座れるほどの大きさの机からも解るように部屋の大きさから解り辛かった

主任の大きさが、姿形とともに解ってくる。被っているロープはズタズタで遠目では一見

黒いゴミ袋に見える。とはカインの談。そのロープの隙間から時折白い肌が見える。

主任が机にたどり着いた。左手を台について回り込むその大きさは、カインを握れる

くらいである。そのまま後ろの大きな椅子に埋もれるように音もなく座る主任、手が離れる。

同時に机台に足をかけて立ち上がるカイン。振り返り主任と対峙する。振り返りながら

主任に目も向けず、まずちらつと窓を見るカイン。窓を見たことに意味はない。

カインのこの態度は、今この部屋に自分だけが呼ばれたのは何故なのか、事態が飲み込めて

いないからである。カイン本人は仕事そのものは自分ながらまじめにやっている

と思っているようだ。なにかしらのトラブルを起しながらも特に問題は無いハズなのに、

呼ばれたことに、疑問と不満をあらわにしたようななんとも可愛い自己表現である。

主任にいまだ目を向けず、立っている机の端からゆっくりと主任の前、机の中央に歩き

出すカイン。

そして物語は始まる・・・。

主任室にて（前書き）

まだまだ解説が続きます。が、本編も動きます。
多少推敲も必要なのでよろちよろ手直しするかもしれません。
申し訳ないです。

主任室にて

ここは冥界、主任室……。広い部屋に一つの黒ずくめの人物が静かに白い手を伸ばし、その大きな机の中央にポツンと立っているカインの目線の先に手を置き、細い指先で

コンコンツ と軽くつつく。カインはその黒い人物に姿勢から向きなおす。人物を見上げる

カイン。眼前にそびえ立つ黒い山のようにも見える。顔部分である山頂部はドクロで

できている。細く白い手も想像通り、白骨の手だ。主任の姿は黒いローブを被ったガイコツ、

という死神のイメージそのものの姿をしている。が、それは仮の姿、といわれている。

主任の真の姿はなんなのか。また、どんな人物なのか、は、会話の中で解るかもしれない。

「要請に従い、カイン、まいりました。」

姿勢を正し、カインが口を開いた。

「うむ。」

二重に響く声、男女混声のような声がガイコツの口から聞こえた。

「で？お呼びになった用はなんですか？今回のノルマは既に終わってますし、トラブルに

関しての始末書も書き終わってますし、その件の減棒も食らいましたし！」

最後の件に妙に語尾を荒げた感があるが、姿勢はそのままだ。

「今回呼んだのは、単刀直入に言えば臨時業務をやってもらいたい。ということだ。」

出していた手を引き戻しながら腕を組み椅子に持たれかかる。

「『やっぱり・・・あ!』」

部屋全体にこもったようなカインの声が響き渡る。だがカインは喋っていない。

「そう思うのも無理はないが、あまりに急だったので出払っている死神達では対処できず、

連带的悪魔の生成も・・・」

「間に合わないんですか?」

「そうだ。」

と言って組んでいた腕をほどき、右手の人差し指をカインに向け一瞬指先が光る。

直後、カインが胸ポケットに手を入れて一冊の手帳を出す。手帳には先ほどの主任の指から

魔力が宿りぼんやりした青白い光を帯びている。光る手帳を見つめていたカインは突然

押し付けられた仕事に一回、怪訝そうに主任を見やり手帳に目を戻しながら器用に片手で

手帳を開く。手帳は手のひら位の大きさで、革製のカバーがかかっている。数ページ

めくった所で指が止まる。手帳のなかほどの左のページ、上から横書きで、これまた人間には

読めない文字で時間、日付、名前、場所、要因、が書かれている。ほとんどの文字は黒いが

一番下の文字は、まるで焼きついているかの様に赤く、時折プスプスと焦げたような音を

させていた。その文字を見てカインは驚いた。

「なっ!一週間!?」

「そうなんだ。霊界からの手違いがあつたらしく人間の因果律動の乱れがよほど酷くてな、

「天命の輪」も偶然死相を見つけたらしい。」

「偶然、て・・・」

「人の生き死には特に決まっているわけではない、が「天命の輪」が下す決定は絶対だ。

通常は半年か二ヶ月前くらいに運命的寿命が判明するが・・・」

「今回はコレ、ですか？」

「そういうことだ。臨時に魂の回収に回す為の連带的悪魔の生成は少なくとも十日かかる。

従って急場に動ける死神はお前だけ。というのが今回の経緯だ。」

主任の言葉を全て聞き、少し間をおき、

「・・・ふん！・・・」

大きな鼻息でのため息。カインは頭をかきながら再び手帳を見る。

「『へえ、日本か・・・あ！くそ！』」

再び部屋に響くカインの声、この声は口から出てはいない。この部屋が魔界の冥界にある

という特殊な空間ならではの部屋だ。ということだ。この主任室は部屋に入ってきた者を

所有者が支配することができる。死神は、人間の生命、魂を扱う重要な場所で、しかも魔界側

の存在である。邪悪な存在から偽りを行う者がいないとは限らない。そこで、死神の世界、

冥界を支配する冥王ハーデスは、その部屋そのものに、ある種の魔力を宿らせた。【思いの鏡】

と呼ばれる力で、その部屋に入った者は、いかなる者でも、心の中を音にして出してしまう。

部屋全体に効果があり、その部屋の支配者であるとされた者（主任）だけは音に出ないという。

死神を管理する上で重要な部署だからこそその魔力である。

その効果でのカインの心の声がでたのだ。

「そう思うだろうと思っていた。お前の好きな日本だ。不幸中の幸いだがお前もマンザラ

ではなくなったるう。今回は緊急、という事もあり報酬には多少

なり色をつけるつもりだ。」

「お！本当ですか？」

「だが、常々言うが、規律を守ろうとする努力はしろ。日頃なかんだで規律を破り、

始末書を書いては減棒を受けているお前だ、今回色をつけると思つて余計増える分、

余計暴れるような事があつたら色付けの話もなくなると思え。」

恐ろしく冷静な言い方だが主任も興奮しているのか、混声に聞こえた声の女性の声が大きめに聞こえた。

「『ちつ！やあれやれ、お見通しか・・・』」

カインという男はどういう時でも凶星を指されると悪態にも似た開き直りをするクセがある。

どうせ心が読まれてしまうのだ。とこの部屋で開き直ると決まつてこの調子である。

「とにかくあと一週間しかない。これよりその予定者を死神カインに一任する。」

この主任の宣言で、その死神の仕事が最終的に決定するのである。

「了解しました。死神カイン。いつてまいります。」

言い捨てるように言い切らぬうちに後ろに飛び、体を振り返らせながら扉へ、着地したのは

扉の五歩手前という距離まで飛んでいた主任はしばらくカインを見ていたが椅子ごと窓へ向け

外を眺めだした。出ようと扉に手をかけたカインが思い出したように口を開いた。

「そういえば主任！旦那さんどんな具合ですか？」

「ん？ああ、おかげでもう元気だ。神の身で【人】に助けられるとは思わなかった。と苦笑

していたぞ。」

「そうですか。じゃあまた勝負しましょうって伝えてください！」

「まったくお前は・・・よくよく上司に楯突くヤツだな。いいから
いってこい！」

ガイコツが笑ったような、そんな雰囲気を感じ取りカインはそのまま扉を出る。

ここで主任について触れておく、主任は主任室ではガイコツの姿だがその正体は冥王である

ハーデスの妻、ペルセフォネである。ペルセフォネは神界での名で、主任の時はヘカーテ

と呼ばれている。主任の際、ガイコツの格好をするのは女と舐められない為、とは本人の談。

もつともギリシャ神話でゼウスの娘であるペルセフォネはハーデスに一目惚れしたらしく、

最終的には駆け落ち同然で冥界にきては、ハーデスが土下座までして帰って欲しいと頼むが

とうとう冥界の果実を口にしてしまい冥界の住人になってしまう。

それほどぞっこんだった

ため、ハーデスも腹をくくりゼウスと争うことになった。結局ハー

デスもペルセフォネを

愛していたという事だ。今ではとりあえず事情を理解し合い仲直りしてペルセフォネとして

神界に帰れる様になったと言う。

先ほどの主任とカインの会話を説明すると、カインは時々、他の悪魔にケンカを売る事がある。

動機は単純、ヒマ潰しである。魔界に生きている者達は【死ぬ】という事がない。人間の心によって創られた以上、人間がその存在を完全に忘れない限り、魔界に存在するものたちは

そこに生き続けるのである。しかし、それは「存在が」であり、その世界で活動するためには

体が必要であり、それを維持するエネルギーが重要なのである。天
魔問わず、その世界で

物体が形成し、その空間に含まれる成分を魔力。その魔力の密度、圧力によって、それぞれの

世界を形成しているのである。カインは魔界の魔力で体を形成しておりその魔力は魔界独特の

性質を持っている。天界、神界などそれぞれもまた、性質が違い、一言で魔力といっても

いろいろある。しかし、カインには他とは決定的に違うものを持っている。胸元に輝く

乳白色の宝石「マリア」（カインはこう呼んでいる）である。魔界の魔力で形成された体を

持つカインの胸元に光るマリアは魔界に存在するどの性質の魔力とも異なり、最も近いのは、

人間が持っている気、魂と体の作用で発せられる「霊気」。もつと言えば、人間の生命で

できている。という者もいる。なぜそれがカインにあるのか。カイン本人も解らないらしい。

死神を始める頃くらいから、気づけば胸元にあった。とカインは言う。そしてその頃から、

カインは、「成長する悪魔」になった。悪魔などは、本来、いかなる者も、その存在理由、

概念から、それ以上強くなる事、以下に弱くなることはなく、成長できないのが摂理と

されていた。また、「死」がなくても活動する中で、ある事で（ケン力等で）体を維持

できなくなると、その硬いの中樞意識は、ある場所に転送され、体を形成するまで停滞期

に入る。だが、カインはどういう事態に陥っても、その体から意識が無くならない限り、

マリアがたちどころに回復、というよりも復元してしまう。だからこそひとつの身体で

多くの経験がつめて、カインは成長する事ができるようになったのである。今では腕試しと、上司である冥王ハーデスにも挑戦し、手傷を負わせ、マリアが治した。というのが先ほどの

会話の内容だ。もともとカインとマリアは別物なのでマリアを離し、別の対象にマリアの力を

使用することはできる。が、大なり小なりその力は一日に一度が限度だという。また、マリアは

カインの精神面にも大きく影響を与えている。もともと死神を始めたキツカケは主任のスカウト

らしいのだがそのスカウトした理由はカインが人間に興味を持っているからだという。

何故人間に興味を持っているのかはわからないが、マリアの存在がその原因の一端にあるのは

間違いないだろう。

さて、長々と話したところで・・・再びカインは人間界にやってきた・・・。

人間界でのカイン1（前書き）

ようやくカインは仕事をするようになりました。
いろいろあつてあんまり書いてませんがなにとぞ、
来週はすぐにでも更新します。

人間界でのカイン1

雑踏・・・喧騒・・・そんな言葉しか浮かばないような世界・・・人間界は

とある国のある街。相も変わらずウルサイ街だ。でも、そこがいんだよな。そこはアジアで

最も電子関係で有名な街だ。今、俺がいるココはこの街の中でも有名な巨大量販店。俺が

行きつけの店の一つだ。人間界で仕事、アジア圏内、この二つのワードが揃ったらもう決定！

というほどよく来ている店だ。でも別に何かを買う、という訳ではなく、ただなんとなく入って

しまっただよな。そして入る度に電氣量販店ならではの、ちょくちよく目にするこの「テレビ」っていうのはものすごい発明だと思う。遠い国の物、過去の物を見る事ができる、というのが俺のそう考える理由だ。過去に戻る事は

できないが、過去を残そうとする気持ちを形にしたのが「テレビ」だと思っただよな。

そう考えると、つくづく人間ってたいしたもんだと思う。さて、あんまりだらけててもしょうがない、なんたって今回の仕事はあと一週間しかないんだもんな。ちゃんと仕事をしましうか！

カインは対戦画面から切り替わった画面を見ずに席を立ち、そそくさとその店のゲームフロア

からその階のジュースの自動販売機でジュースを買うフリをしてコートの内ポケットから手帳を

取り出し、最新の名前が書いてあるページを開く。片手で器用に開いた手帳を見ながら

「ガコン」と落ちてきた缶コーヒーをこれまた器用に片手で開けな

がら口に運び、踵を返し

ながら人の少ない壁際で背をもたれるように落ち着く。あつた。数ページ過ぎて左のページ、

四段目に魔力で赤く焼け付いた文字がある。そのほかの文字は黒い。進行中か、済んだかの違いだ。顎を上げ缶コーヒ―を勢い良く飲み干すと隣の缶入れに収める。そして空いたその右手の人差し指を手帳の赤い字にそつと触れる。文字が手帳に記される時、その人間の霊気が若干ではあるが含まれて記される。その霊気と死神の霊気を掛け合わせ、死神は己の体と人間の体を結び、その人間の方向を探り、その人間を見つけるのである。カインは人間界に出る前にも一度その人間の霊気確かめ、その近くに出現したのだが、運がいいのか悪いのか、出た場所はカインの好きな電気街、急ぎたい気持ちもあつたろうが、ついフラフラといつもの店に行つては必要ないのにトイレの個室で具現化し、いつもの階のゲームフロアで対戦ゲームに興じてたが、対戦に負けて我に帰つて・・・というのがこれまでの流れである。まだ対戦したい、という未練があるのか、ゲームフロアを覗きながらその階のトイレへ歩き、幸い誰もいなかったの

でそのまま具現化

を解きそのまま目の前の壁へと突つ込む。壁をすり抜けるとそこは地上から離れた中空、高さにして五階に相当している。カインはそのまま情性で飛びながら手帳を片手に文字から読み取った、一週間後には死を約束されてしまった「予定者」と通称される人間へと近づく。まるで無重力空間にいるように優雅に流れるように飛んでいるカイン。ふと顔が下を向いた時その下を見やる。平日だからかそうそう車は通っていないが、両脇の歩道はまるでパイプが詰まっているかのようにゴチャゴチャワラワラと人間で敷き詰められている。法則性もないような一人一人の動きは個人個人で目的地はあるのだろうか、人ごみの中遅々としてしか進まない様はうごめく蟻のようだ。とはカインはいつも思う事だ。だが、カインはこの街の、こういうところも実は好きだったりする。ワラワラする人ごみに混じるのも

カインの楽しみの一つというが、あまり理解したくない趣味である。流れるように飛びながらいろんな看板にすり抜け進んでゆくカイン。ウトウトし始めたのか目をしばしばせていたが、急にハッキリ目を開けて立つように姿勢を戻す。見つけたようだ。手帳で読み取った霊気と、そのカインの先にいる人間の霊気が完全に同調した瞬間。カインの意識にハッキリしたその人間の霊気が流れ込んでくる。そこで初めてカインと「予定者」の関係は成立する。その人間の死へと向かって・・・。

予定者とカイン

目の前には壁・・・よりもガラスの割合が多いビル・・・高さは六階建て。カインはその三階の位置にいる。

手帳を片手に中空で神妙な顔立ちのまま佇むカイン。

「いたな・・・。」

カインの目の先、照り返すガラスの奥、机の群れの中で蠢くように働く人々・・・コピーをとっている人。

PCとにらみ合いながらキーボードを叩く人。少しスペースのあるあたりにある机の人に怒られているのであろう頭をペコペコ下げている人。

『典型的なサラリーマンか・・・なんかつまんねえな・・・。』

カインはその風景を見ながら思った。カインは自分が特別な存在な上に特別な立場でいる事を自覚している嫌いがある。

実際、元々は単なる悪魔であつたのに、経緯は不明だが「マリア」という体を復元してくれる宝石を手に入れてからは、

その宝石に幾度となく危機を救われ、また、人間に興味を持ち始めたキツカケも「マリア」を手に入れてから

「マリア」とおなじ力を宿す人間というものを知りたい、という気持ちからで、そんな気持ちは精神世界で

固定概念のまま創られた悪魔、天使や神々さえも持ち得ない物でそれを持っている自分はすごい！

と有頂天になるのも当然だった。上司（冥王ハーデス）に胸を借りる（ケンカを売る）などの無謀も

「マリア」有りきであつて、ちよくちよく人間界で、無意味に具現化し人間界でのどうでもいい干渉も

自分にしかできない。と変な方向での自慢を持っているのもそのせいである。しかも人間への干渉は

プライベートに限った事ではない。死神として死の予定を決定され

た人間（予定者）を任された時、

その人間が、自分の気に入った人間だと、

『どうせこいつ死ぬんだ。だったらそれまで好きな事させてやろう！』

そう考えて具現化してはその人間を（死神であることを告げるかどうかは人間次第だが）手伝ったり、

助けたりして。死の予定の時間を延ばしたり、最悪、その人間の運命を変えてしまい、冥界を混乱させて

しまった事もある。（後者でよほど懲りたのか自粛はしている。そのしわ寄せがプライベートでの具現化。

という訳）カインの気に入る人間の基準は、「人間らしく」らしい。この「人間らしく」というのもかなりいい加減で、

「生まれて死ぬまでが短い人間はその中で、自分の生まれてきた目標を自分の中で作り、

その目標に向かって必死になって輝くように生きている人間」ということだが、どんな漫画を見たんだ？とツツコまずにいられない基準だ。が、

これくらい極端に基準を作った上で、そうそういないそんな人間とめぐり合うのも死神の醍醐味だ。

と考えてるようで実際滅多に会えないので、ここ最近の死神の仕事中は特に支障はない。そして今回も、

どうやらこの人物はカインの基準には達していなかったようで、『つまんねえな・・・』はこういう心境から来ている。

すると何かに気づいたように振り返るカイン。ついさっきまでゲームをしていた大型電気店が上の看板が

指先くらいの大きさでしか見えないほど他のビル群に埋もれてしまっていた。どうやらのんびりウトウトと

霊気を辿ってきたせいで町から離れた事に気づかなかったようだ。カインは仕事の仕方を計画たてることがある。

今回はせっかく電気店が近いんだから予定者に威嚇のための攻撃的

な妖気を帯びさせ（死神特有の能力で、周りの悪魔に死相の出ている予定者に死神個人の力の妖気を人間に含ませ、その妖気より弱い悪魔などを

よせつけないようにする。有効範囲は狭い）その間に遊ぶ。という予定を組みかけたがその距離を見るに、

『無理そうだ』と判断し落胆する。

『まあ・・・仕事だもんな。一週間の我慢、か・・・』

カインは今回はハズレだな。的なことを思いながら体全体で気持ちを表現するように

うな垂れながら目の前のガラスに埋もれるように入っていった。

プルルルルル！プルルルルル！

「おーい！企画書どうなってんだ！もう来てていいハズだろ！」

「木下あ！木下あ！経理行って報告書だしてくれえ」

「へええ、結構盛り上がってるじゃないか」

カインは思わず呟いた。外から見ていた雰囲気も、仕切りだらけの机の渓谷を縫うように走ってたり、

大きな荷物を抱えながら、はしゃいでるのがニヤけながら転んでたり、怒られてたり、と、

見た目にも忙しない職場だな。とは思ってたが、中に入り、騒がしさを体験して、こういう現場は

たいがい陰気で静かなもんだというカインの固定観念は崩れ去った。

「でも、まあ・・・スーツマンってのは・・・あんま期待できないな。」

何を期待してるのかは知るところではないが、頭を一掻きして再び手帳の文字に指を這わせて

予定者の霊気を探り人物を特定する。窓際直前、目の前におそらくこの部署で一番偉いのだろう、

今もまだその目の前でヘコヘコ平謝りを繰り返す男に叱咤するふく

よか過ぎる男性。

「こいつ・・・じゃないな。」

目の前であんまりうるさかったので、この男か？と期待に近い気持ちで確認したが違ったが、
予定者はその直後に見つかった。

「こいつか・・・。」

カインは叱っている男越しに見える謝り男を見つめている。カインの手帳の文字にはその男の名が記されている・・・。

彼の名は明日野　日出志。死を決定付けられた運命の人間の名である・・・。

運命　　というもの

カインが明日野　日出志の担当になって・・・一週間が経とうとしている・・・。

そう、明日野の死亡予定期限がこの日、カインはこの日までほぼ付きっ切りで明日野を監視してきた。

一週間前、カインは明日野を始めてみた印象を「単なる典型的な仕事人間」と思った、第一印象は上司に

平謝りを繰り返すあんまり仕事ができない人間なのか、と思っていたが、その後の彼の勤務態度、

部下への指示等を見ていると、ちょっとしたミスでの叱咤を受けていただけのようだった。仕事が終わって、部下や上司に誘われる事も多いようだが、彼はそれらを丁寧に断るだけだった。「奢りますよ」との声でさえ彼を動かす事はなかった。カインならホイホイついていった所だ。

こんなに誘われるのに、全くついて行かないということは、彼個人的なところでよほど楽しい事を

しているのか？ともカインは思ったのだが帰ってからの彼は・・・。

「ふわああ・・・。」

カインが目覚めます。そこは都会的な町並みの中のマンションの屋上。時間は八時、を少し過ぎていた。

予定者である明日野のマンションである。彼はあの日から今日までただの一度も寄り道、道草を食うこともなく自宅から職場までの往復だけだった。それも見事なまでに。帰ってからの彼も、夕飯、くつろいでは十一時には寝て、六時に起きて朝食、支度して九時には職場に間に合うように出発。そして仕事。である。帰ってからの彼を見ていたカインが、今日までに解った事があるとすれば彼はバラエティ番組よりドキュメンタリー番組が好きな事と、野菜の摂取は

野菜ジュースで済ませるタイプだ。という事くらいなほど、なんにもなかった。ただ時折、ベランダから遠くを見る事があった。たいてい夜なので、夜空を見るのが趣味なのか？とも思えたが、空を見ているわけではなく、かと言ってどこぞの窓でも覗いてるのか？というわけでもなかった。ともかく、たった一週間、ではあったが、それでも一週間だった。七日間は短いようで結構な期間である。人として、何かちょっとした他人には言えないような秘密を持っていたても不思議はない、ハズなのに、この七日間はカインにとって安全に離陸して、安全に着陸するような、むしろエスカレーターで、右足から乗って左足で降りるような、最後のたとえばどうかと思うが、要するになんの変哲もなかった。『こういう人間もいるんだな。』この一週間を振り返り、ふとそう。思うカイン

「大変だったな、三十年間……。今度生まれ変わるとしたらよ。楽しくやれよな……。」

そう呟きながら階下の明日野の部屋、の明日野の靈氣に目を向ける。見る訳でもなく向ける。

すると地上が目に入ったカイン。少しの間した後、なにかの違和感に気づくや腕時計を見る。

『八時半？あれ？なんか変だな？』

いつもなら、明日野は既に自宅を出ている時間だった。八時十分前後に出て、八時半に駅、二十分で降りてすぐ側の仕事場へ。というのが日常だった。が、「休みなのかな」と、すぐ勘付くカイン。そういうえば、という事もないが、カインが見てきたこのマンシヨンの周囲の感じからして、いつもより人の出も少ない。

『そうか、今日は休みか……。でも待てよ？明日野は今日が予定日だったハズ。そういやどうやって死ぬんだっけ？』

おおよそ人の言葉ではない不謹慎な言葉を考えながらカインは手帳を探り出す。ページをめくり文字の書いてある最後のページ。最後の行。その文字はただの黒い文字ではあったが、ほかの文字よりも明らかに暗さのようなものが違っていた。明日野 日出志の行であ

る。

『明日野 日出志。確かに今日だな・・・あと一時間ちよつとか・・・。事故？でも今日休みみたいだけど・・・どっか行くのか？場所は・・・ここはドコだ？この男に一週間ついて回っていたが知らない場所だ』

カインは住所の書いてある文字をなぞりながら、その文字から伝わってくる魔力で現された場所のイメージを思い浮かべながら不思議に思った。だが、男は必ずその場所を通る。それがその男の最期の運命だからだ。

運命。カインはこの言葉を思うとき、予定者のことを考えると、自分と重ねながら掴み所のない、もどかしくも切ない不思議な気持ちになる。カインには死神を始める前の記憶がない。生命の宝石「マリア」に会う前の記憶。自分はどんな悪魔だったのか？なぜ自分は今こういう形をしているのか？そんなことを考えるときが、このカインという男にもある。そんな時よぎるのがこの「運命」という言葉だった。決まっている事、決められた事。それは誰にだろう？どういう理由で？今の自分も決められた事なのか？そんな暗闇の中を手探りで何かを探すような事を考えていると、決まって「マリア」が慰めてくれるように輝く。その暖かく輝くマリアに気づき、『沈むのはよくないな』と元氣を取り戻す。

「それ」が「そう」ある時、「そう」なるべきなのだ。

死神を始めるとき、主任のヘカーテより聞いた言葉だ。自分が人にどういう干渉をしようとも、その人間の運命に差し障れる事などありえはしない。だが運命を知る死神はその人間の運命を知っている。以前カインのしてしまった事はそのあり得ないことをしてしまったという事だった。

それは自分のように、自分ではない誰かに、自分をいいように変え

られたと思い込んでいたカインが決められた運命を変えてやろうとした一種の反抗の現われであつたのかもしれない。この時は最終的にその人間の寿命は延びたがカインは百年の幽閉。別の人間の魂が百人分、大型の天災という形で奪われる事となったという。カインはその時、自分が幽閉された事より、その時の運命の代償を痛感したという。マリアはこの主任の言葉も思い出させてくれる。

今も輝くマリアに沈んでいたカインも苦笑しながら撫ぜて言う。

「いつもいつもすまないな。こういうの考えるたびに甘えちゃってるな、俺、ははは。」

と、マリアを撫でていた手の腕時計に目が止まり、

「――やばい！もう九時半過ぎてるぞ――！」

ドツキリにひっかかったような声で叫びや、ここでようやくマリアはその輝きを止めた。どうやらマリアはカインに時間を知らせたいだけだったのかもしれない。しかも、焦っているカインにダブルパンチ！予定者の明日野の霊気が周囲から消えていた。テンパっていたカインだったが、一先ず明日野の霊気を追うことにした。マンシヨンから仕事場とは逆方向に進んでいる予定者。

妙に早く、何かに乗っているようだ。追いついたほうが良いと判断してカインも明日野の後を追う。

運命は刻一刻と近づいている……。

運命　　というもの（後書き）

作者は生粋の運命論者です。が、基本的に自論の信者なようなもので「運命は誰でもすでに決められている。だが、それを確かめられるのは自分自身だけである。今、現時点で思い悩むのも、その後の決断も運命に他ならない。だったらできるだけ後悔しない運命にしたい！」ってのが自論です。「運命に基づいた死」としたものが主体の物語ですが、こんな考えした人間の書いてる事なんで気楽に読んでください。

なお、登場人物、団体名、その他の事柄は全てフィクションです。

明日野 日出志 運命の日

今、九時四十分弱。このままなら間に合いそうだ。病院の面会時間は九時前からでも良いそうだが、なんとなく十時を越えないと、なんか会い辛いんだよな……。二週間前に買ったプレゼント。あいつ……。喜んでくれるかな……。？その為に、この十日間、電話もせず耐えてきたんだ。昔からなにかしら決意めいた事をする際、それをするために好きなもの、好きな事を我慢する。子供時代に培ってきた事だけに習慣付いた事だ。だが、企画も踏まえ任された仕事を終わらせるだけに十日もかった。でもそれが好都合だったな。焦ってニアミスもしたがチョロつと修正してなんとかなったし、部長や木下達との飲みも断ってまで内緒にした事、部長には言うべきかもしれないが事情が事情だったからな。自分で課した事だけに忙しすぎた。でも、きつと祝ってくれるだろう。この日のためだけに頑張ってきたんだから。あいつの誕生日……。用意した二つのプレゼント。もうすぐ、もうすぐだ！ん？赤か。いや、大丈夫だろう。すまない急ぐんだ！あ……。！

……。ドッ！ガシャアア ン！！ザリザリザリザリ

……。ズキンッ！

痛みで我に返る。何が起こったのか、朦朧としている意識、体全体が痛い、横になっているのか横たわる半身に冷たい感覚。雑踏と騒音、喧騒と排気ガスが俺を包んでいる……。痛みの中、何かに怯えるように閉じている目を開ける。先に見えたのは……。真っ直ぐ見つめ返すひび割れたヘッドランプ。その奥に曲がった電柱……。

うぐ！ダメだ、何も考えられない。半身に感じていた液体の感覚もない。頭が中心からガンガンする。

痛い！痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い・・・。

誰か助けてくれ。助けて助けて助けて……。真……。由子……。

今・・・一つの魂が「不慮の事故」という形の運命によって終わりを告げようとしている・・・。

それを見る中空に止まるカイン。「この男に何があったのだろう？」カインの心の中にはこの疑問がひしめいていた。カインの開く手帳には事故の予定、この交差点の場所が記されていた。

男は予定通り、の時間、場所で予定通りの運命を迎えた……。だが、なぜ、カインが担当となつてからだが、今まで通つた事もなかつた場所だつたこの交差点にこの男は来たのか。手帳には死の運命以外記されてなく、その理由を知る術はなかつた。今になつてカインはこの男に身勝手な興味を持ちはじめた、が、もう後の祭りである。深いため息の後、カインはゆつくりと降りてゆく、雑踏と喧騒、野次馬の人だかりの中心にある血の池に浮かぶ離島のように横たわる明日野に向かつて……。

カインと明日野 日出志

ふううゝ・・・。

突然聞こえたため息のような音で我に振り返り目を開ける。その音はどんな雑踏や騒音よりも鮮明に聞こえた。が、途端に開けた視界にそのため息のことは消し飛んでしまった。何だこれは……。今、俺の目の前にはビルがある。しかしそこは三階の窓。窓は開いていて、三人ほどの人が身を乗り出して階下の騒ぎを見ている。俺が見えていないのか・・・？俺も下を見る。

・・・！！・・・

俺がいた！俺の真下数メートル先に真つ赤な海の真ん中に横たわる身動き一つない俺がいる……。その側にひしゃげた俺のバイク、その先に何かにぶつかったのか横腹を押さえてるかのよう曲がっている電柱。・・・電柱。最後(?)に俺が見たヤツだ。それを取り巻くように人だかりができる。ぞくぞく、ぞくぞく集まってくる。その中心には当然横たわる俺……。それを見ていると無性に俺が切なく、息が詰まるくらいじつとしていらなくなる。

「よせ！見るな！見るなよ俺を！どっかいけ！俺を見るな！」

叫べど音になつてないのか、全てのものが俺を意に介していないようだ。しかし何故かは解らないがだんだん横たわる俺との距離が近くなる。俺の行きたい場所が迫ってくる。足のウラに感触がある。

地面に降りたようだ。透明な体でも地面は透けないのか……。そんな感想も自分の体を見て吹き飛んでしまふ。膝をついて体に触れようとするも、触れない。地面には透けないのに！膝に感じるはずの血の感触もない。俺の手は俺の頭の位置で顔に埋まりながら手が空気をなでるように動いているのが解るだけだった。でも、俺が俺を見てる。周りが俺たちを見てる。俺は俺なのに、この俺はなんだ？頭の中でいろいろなことが浮かんでくる。でも一つしかない。考

えられるのはもう「死」(一つ)しかない！でも認めたくない・・・！！

ピーポーピーポー・・・。独特なサイレンにドキつとする。救急車が来た。あの音はどんな時でもソツチを見てしまう。野次馬達も一斉に救急車を見る。前、両ドアが開き素早く隊員が回り込み後ろを開く。人だかりを割り白メット、白い服が三人飛び込んだ。呆然とする俺を他所に俺をすり抜けて、俺を抱きかかえる。血でべつとりした自分の両腕を何も言わずに。もう一人が足を、もう一人はタンカのようなベッドのようなものの端を下げて待っている。俺が俺から離れていく・・・。タンカで運ばれる距離と共に俺自身が上へ上へと浮かび上がっている。なんで？距離が離れる事で俺の体にある紐(?)に気づく。あまり気にならない色で頭から伸びている紐。ハッと気づき自分の頭を触る。同じ様に紐のようなものがついている。と、突然。

グイッ！

首を後ろから掴まれている！誰だ！？じたばたしていると、俺の体が救急車にしまわれたその時、・・・ドクンッ！・・・血も通ってなさそうなの今の俺の体に、今まで感じたことのない鼓動のようなものを感じた。途端に熱くなる俺の体。体の中に黒い何かが広がっていく様だ。救急車の側に止められているライトバン。俺はその車を知っている。その車の運転席側のドアの前で救急車を見ている男。その男は知らない。が、最後に見たこのライトバンの中にあつた面影が重なって仕方がない！ライトバンと男が結びついてゆく。いや、結び付けようとしている！俺をこんな風にしたライトバン！あの男が運転していた！俺にぶつかった男！俺を殺した男！！あの男のせいで俺は！！！！

許さない・・・許さない！許さない許さないゆるさないユルサナイ！俺を殺したあの男を・・・俺が殺してやる！！！！

「まあて待て待て・・・。」

声がした。瞬間初めに聞いたため息を思い出した。息が詰まったかと思ったが物凄い力で首からあの運転手とは反対方向へ投げ飛ばされた！が、すぐに頭が引つ張られるように止まった。飛ばされた元の位置に目を向けると、長身で長髪の長いコートを着た男が紐を右手でぶらつかせながら俺を見つめていた。

な〜るほど・・・こういう「事故」だったのか・・・ま、予定通りか。でもさつきは少し焦ったな。この明日野からあれ程の「憎悪」が出るとは思わなかった。確かに、死にたい人間なんかそうそういる訳ないもんな。くだらん理由にしろ憎悪も沸くか・・・。とにかくあんまり時間をかけるのも「魂の質」に良くないな。・・・。

ふうう〜・・・。

カインは再び一つ深いため息をして最後の仕上げにとりかかる。

カインと明日野 日出志（後書き）

人間死んだ時ってどんな事を考えてるんだろう？

物理的な身体は動かなくなるだけで、その中に入っていた魂^{こゝろ}はどういう経緯でなくなってるのか・・・？そんなことを考えながらも
しかしたら・・・という感じから生まれた流れですので。ご了承ください。

一人一人の運命

「俺の名はカイン。俗に言う死神ってヤツだ。明日野日出志さん、アンタを迎えに来たぜ。」

ここまで言うと、男の体から力が抜ける。男の顔はカインを向いているがカインとは違う場所を見ているようにぼんやりと中空を見つめている。空中に佇む二人。明日野の霊体はその場にへたり込んでしまった。

・・・すると・・・。

「・・・やだ・・・いやだ！いやだ嫌だ！死にたくない！何で！？何で俺が死ぬんだ？なんで死ななきゃいけないんだ！？俺は死ぬわけにはいかないんだ！！俺が死んだら誰が・・・。」

そういつて男は急に何かに気づいたように下のバイクを見る。が下に動いた頭はそのままバイクを通り過ぎライトバン方向へ、そしてそのままあの運転手へと移動する。

『霊体には考える脳がない。そのため思ったことが直接行動となる。明日野の霊体は自分の体を見ようとしたがそのまま視界に入ったライトバンを見て再び怨念が生まれ、そのまま運転手に目が行った。という所だろう。となると次の行動は・・・あ！』

カインがそんな事を考えている間に予想通り、明日野の霊体は体の中心から前以上に赤黒い色を滲み出しながら憤怒の形相のまますごい勢いで下へと降りていった。

「あ！バカ！！」

カインが慌てて手を伸ばす。が、素早く降りていく明日野の霊体からつられて下がるゝ魂の緒にその手は届かず、カインの手は空しく空気しか掴めなかった。

「悪いのは、俺を殺したあいつじゃないのか！あいつなのに！！あいつ・・・あいつ！！！！」

霊体が物理的な世界への干渉はできないが、怨念のようにそこに留

まり、またその人物に固執しようとする、その負の感情によって生まれたものは引き合うように集まり次第に大きくなってはその人物には「呪い」として、場所には「心靈現象」として二次災害的に影響を与えてしまう。なにより死神の仕事として、その人物の魂を怨念などに劣化させてしまうと仕事を終了した際に、報告から査定された報酬が極端に下がってしまう。カインの心配は概ね後者だがめんどろなのも嫌なので急いで追う。自分の体の上（体に影響のない位置）に魔力の爆発を起して一気に降下する。カインは主に火を起す力と念動力に長けており念動力で大気中の空気を圧縮させてソコに火種を起し爆発させてその力を加速に使うことが多い。爆発そのものは微弱でも、その瞬間の爆発を魔力で増幅させて移動する。という芸達者な部分も持っている。凄い速さで明日野に追いつこうとするが、『そもそもそんなに離れていたわけでもない位置から怒り（？）で我を忘れて突進するリード（魂の緒）付きではある猪（明日野の霊体）を壁（恨まれている運転手）にぶつかる前に止めるというのは酷な話だよな。』追いかけながらフとそんな例え話が浮かんだカインだった。が、『こういう経緯であれ怨念になってしまった魂は人間に憑りついてしまう前に強引に引き離すしかないな。』そう結論付けてカインは降りながら腰のベルトの後ろにしまっている得物に左手を伸ばす。めくる指が得物にかかった時にはカインは明日野に追いついた。しかし明日野は運転手に襲い掛かってはいなかった……。

明日野は真下に降りていた。運転手に向かっていた訳ではなかったように足元には自分の体の形がまだ残る元の自分の位置に立っていた。その霊体には不思議と、さっきまでの赤黒い怨念の色はなく今までの半透明な体で、それでもやはり運転手を見ていた。カインは明日野の背後に立ち、もう逃げられないように一応右手で明日野の頭の「魂の緒」に手を伸ばす。明日野はそのまま運転手を見つめている。

カインは、明日野の霊体にひたすら謝り続ける運転手と、その運転手をただ何も言わず見つめている明日野の二人を見て再び「運命」というものを考える……。
だが、それも「運命」なのである。

一人一人の運命（後書き）

本当なら一気に最終回といきたかったんですが
少し補完してきたかった事を書いたら、
いい長さになったのでついw
次回で終わります。

さ・よ・な・ら のその先・・・

そこは何もない、何もない場所。

おおよそ地球上ではまず探してもない場所。それもその筈、ここは魔界、それも冥界と霊界の境界のある特殊な場所である。

カインは今、黙々とそこを歩いている・・・。足元は他の魔界の場所のように雲だか煙だかで足首まで埋まっている。空も延々と雲が敷き詰められ先のほうを見ても地平線が解らないほどだ。が、程なく歩いているとカインの進行方向がうつすら黒がかった。カインはその地平線の変化に足を止めたが再び歩き始めた。カインの髪を揺らす風は時折、ではあるがどこからかすすり泣く声や読経、切なく悲しい鎮魂歌の様な歌声を運んでくる。ここは最も人間の死と関わり深いため、その故人を偲ぶ人の心がこの場所まで届くのだと言う。その泣き声の只中をカインはそれでも無言のまま歩いてゆく・・・。

カインは直後までいた人間界でのことを考えていた。

「・・・俺って・・・なんなんだろうな・・・」

この場所は結局魔界である。空間転移での移動ができるカインは目的の場所に行こうと思うだけでその場所に辿りつけるのだ。しかし敢てカインは考え事をするために少し距離をとって歩いている。考えている事、無論「明日野 日出志」のことだ。

もう謝り疲れたのか、崩れ落ちたまま合掌の手だけを上げて明日野の倒れていた場所を向いている運転手、その運転手を複雑な表情で見下ろす明日野。の霊体。この直前まで運転手の事を自分を殺した男として恨んでいたが、運転手の哀れな姿を見て自分の起した事を思い出し、明日野の性格が恨みまでかき消した。が、結局のどこ

る、明日野が死んだ直接的な原因は、明日野自身の信号無視と運転手の加速だった。またこじれる可能性を考えたカインは『なぜこの男が事故を起こすほど焦っていたのか、疑問を聞いてみたかった』という気持ちを抑えて最後の仕上げにかかる事にした。明日野の霊体の頭から伸びている「魂の緒」を握っているカインの右手がぼんやりと光り始める。その光はゆつくりと明日野の魂の緒ににじみながら染まってゆき、明日野の頭にかかり始める。すると明日野はビクツとなった後、まるで眠気に襲われたように脱力しその顔だけで運転手から左を大きく向いた。明日野の肉体がある方向である。カインの手からの光は死神特有の魔力。死神の仕事を行うためには修得しなければならない必須魔力である。人間の霊体と肉体を離し、その霊体を魂の状態にするためには霊体に、ある儀式をさせる必要がある、この魔力は霊体にその儀式をさせるための魔力なのである。手から霊体にしむ光には霊体の意識を強制的に鎮める力、霊体外面を保護するコーティングのような作用、霊体と肉体を切り離すための儀式となる言葉を言わせる魔力からなっており、光はもう、明日野の体全体に及んでいた。あとは明日野の霊体が肉体に別れの言葉を言うだけ。言った瞬間、カインの左手がいつの間にも用意したのか、バタフライナイフのような柄をした、刀身が一メートル以上ある細身の剣が断ち切る手筈になっている。その剣の切っ先は既に右手のすぐ下に近づいていた。いよいよである。とその時！

明日野の頭がゆつくりと肉体のある方向から別の方向に動き出した！カインはびつくりして右手を離しかけたが寸でのところ離しはせず、魔力の安定は保たれた。魔力は確実に流れている。それは明日野の霊体を包む光が何よりの証拠。この魔力には霊体ならば誰も逆らえない。動くなどできない。筈であった。そこに驚いたカインだったが事態はなお進んでゆく。明日野の霊体はゆつくり顔をバイクの方向へ向いてゆく。魔力が効いているのだろう、時々震えながら向き直ろうとしている。一度流したこの魔力は流した死神本人でもどうする事もできない。カインはドキドキしながら霊体がなにをし

ようとしているのか見守っていた。バイクには実況検分なのか大柄な背広姿の男や独特の服をまとった鑑識たちが群がっていた。人だかりも、もうほとんどなく、血だまりも乾ききっていた。とうとう明日野の霊体はバイクの方向を向ききった！そして同時に出てきた右手の人差し指がバイクを指して、

「バ・・・バイクの・・・左のバックに・・・子に・・・プレゼントが・・・」

直後にバネが返るような勢いで顔が肉体に向き直る。愕然とする力イン。

『なんだ？今は・・・？あの一言を言うために？あの一言のためだけに？魔力に抗ってまで・・・俺に・・・』

霊体である明日野は誰にも語れず見られる事もない。誰かに何かを託すなどできるはずもない。

だが、明日野は確かに、魔力に抗ってまで大切な何かを、何かに託すように、呟くような声で叫んだのだ。カインにはその明日野の必死の叫びが、自分の今までの人間への価値観に深く、鋭く突き刺さった感じを受けたのだった。

「・・・さ・よ・な・ら・・・」

突然明日野から聞こえた肉体との「決別の言葉」で我に返り、急いで左手の剣で「ブツッ」という音と共に緒は断ち切れ、肉体側の緒は空間に染みるように消えてゆき、明日野側は霊体に吸い込まれるように消えて、明日野の体をした霊体はその包んだ光を強くしていき、明日野の輪郭を消していきながら次第に球体になり、その大きさが手のひらに乗るほどの大きさになった所で右手に乗せ、

カインはいつの間に剣をしまったのか、空いた左手で器用にコート
の右側についているポシェットを開き、乗せた魂をそのポシェット
の中に滑らせるように入れる。蓋を閉めてため息をつくカイン。人
間界での仕事はこれで完了した事になる。後は、この明日野の魂を
無事に霊界に届けるだけ、なのだが。

『これでいいのか？』

考えるカイン。だが、これでいいのだ。死神という現実世界とは干
渉し得ないただ魂を運ぶだけの存在の者がこれ以上のことをする必
要も義務もない。バイクの中も、いずれ誰かの手によって明日野の
愛した女性の元へ送られるかもしれない。そうでないかもしれない。
なんにせよ。カインのすべき事はこの時点では終わったのだ。しか
しカインは今までの自分のことも考えていた。

自分は今まで「マリア」のおかげで人間に興味を持って、人間に
最も理解ある死神だと思っていた。始末書を書くことが、注意を受け
ようが好きにした結果、たいして悪い事態になった事はそれほど多
くない。だが、それは独りよがりだったのではないか？明日野には
一週間しか期間がなかったせいでたいしたこともしなかったが、
その最大の理由はただ自分が明日野を、『面白みのない単なるサラ
リーマン』と決め付けてさっさと終わらす事しか考えなかっただけ
で、いざ今になって愛する女にプレゼントを贈るために、魔力に逆
らってまで誰かに託したいと思うほどの情熱を持った人間味に気づ
かなかった自分は、本当に人間を理解していたのか。そこまで考え
た結果、

「このままじゃ終われないな。任されたんだ、やってやろうじやな
いか！」

そう呟くと明日野の入ったポシェットをポンと叩き下へと降りる。

アケローン川の畔で

「うわぁ！な、なにをするんだ！」

今はもう、警察関係者しかいない事故現場。そこに人だかりが散りかけた空気の中、ズカズカと

現場を確保していた警察官を押しつけてバイクに向かって近づいてゆく長身の男。具現化したカインだ。カインに押しのけられた警官はまるで固まったかのように動けなくなっている。

「何をしてる！早く取り押さえる！」

仲間の警官がその警官に向かって叫ぶ。ハッと我に返りカインに近づく。が、『ま、まるで岩がゆつくりと押してくるようだった・・・』押された警官の脳裏にはさっきまでの印象が頭から離れない。叫んだ警官はカインの前に立ちはだかるようにカインを掴んだ。同時に怯えた警官を含め、二人の警官がカインの両脇を挟み止めに入るが、

「心配するな。なにも影響しないよ・・・多分。」

と、カイン。予定者の遺物を取り出そうとしているのに「影響しない」もないものである。が、カインは警官たちを引き摺りながらバイクの前までやってきた。前の警官を片手で首根っこから掴み上げる。

「ううわぁあ、あ。」

握っている訳ではなく掲げ上げてるだけなので警官の口から怯えた声が出る。あたりの警官はその光景を見てカインから飛び退くように離れてしまった。

「お前！なにをしてる！これ以上現場を乱すようなら・・・。」

「だあから心配するなつて！すぐ済むから。」

騒ぎに気づいて何やらを側で話していた背広姿の大柄な男が怒鳴りながら近づいてきたが、重なるように喋るカインを見るとその場で静止してしまった。カインの言葉に怒気はなかった。別に殺気を込

めてニラんだという訳でもない。が、背広の男は修羅場の経験が豊富なのだろう。カインの容姿、立ち振る舞いを見て只者ではないことを察したようである。

「み、宮川警部補……？」

カインの腕を掴みながら両足をバタつかせていた警官がすぐるように背広の男を見ていたが、黙ってしまった男を見てその足を止めた。カインはその男を横に置くようにどかすとバイクの前にしゃがむや、『左のバック……やれやれ、潰れてる方だな……』片手で中型であれ相当重いはずのバイクを何かの蓋のように持ち上げる。あらかたの血の海はほとんど乾いていたがバイクの下はまだネチャつとしていた。空いている方の手で潰れているバックを開けて中をまさぐる。あった……。ビニール製のバックがよかったのか中は全く濡れていなかった。明日野の遺物をバックから無事取り出す。ただその箱はバイクの重さで原型をとどめてはいなかった。一抹の不安を覚えるカインだったが、立ち上がりながらバックをそつと元の方向に下ろし、その手の平大の箱を内ポケットにしまう。

「あ！ちよ、ちよつとアンタ。」

流石に現場のものを持ち出されるわけにはいかないと、宮川警部補がカインに注意しようとしたが、

「邪魔したな。こいつはもともとなかったものとしてくれ。じゃあな！」

そういうと警部補の手が伸びるより早くその場を離れる。

「あ！お、おい！コラ待て！」

警部補の声に他の警官たちもカインを追うが、その頃にはカインは既に人ごみに紛れていた。人ごみもカインの行動に注目していたがある角を曲がったのを見たのを最後にカインを見た人間はいなかった。

事故現場では少しの混乱をきたしたが警部補たちはその後無事滞りことなく処理したという。少しの間ではあったがカインが持ち上げていたバイクに鑑識はあの不審者の事を探ろうとしたが不思議な事

に指紋や形跡すら残っていなかったという。警部補を含め、警官たちもそのことを不思議がったがその翌日にはほとんど気にもしなくなり忘れてしまったというのも不思議な話である。

「ふう〜。やれやれ、ちよいつと無茶したかな？あんな形で人間に干渉したのは初めて・・・でもないけどな。はは、こりゃ・・・また始末書かな・・・。報酬の色付けも無理っぽいな。」

あの事故現場から少し離れた雑居ビルトイレの中、具現化を解いたカインが一人呟いている。カインはポシエットに手をかざし、

「さて、例のものは取って来てやったぞ。こいつをどうすればいいんだ？」

明日野の魂に聞く。聞く、といっても完全に肉体と切り離し、魂となった人間はその命そのものとしては存在するがなにもどうすることもない。死神といえど会話ができるのは霊体までである。しかし、魂に触れることで魂の強く思うイメージを見る事はできるのだ。カインは明日野の魂に明日野がプレゼントを渡そうとした女性の所在をイメージで受け取り、その場所に向かった。そしてそこはすぐに着いた・・・。事故現場からすぐ近くだった。『あとちよつとだっただんだ』前瓦病院の個室入院病棟309号室。〔前原 真由子〕・・・。明日野の魂から感じ取ったイメージからこの女性は、生まれつき病弱だという。そういう女性と結婚するには相当な覚悟が必要なはずだ。・・・この男にはその覚悟があっただろうな・・・。男の用意したプレゼントは二つ。箱の中身と、その箱には「結婚しよう」と書かれたカードが挟まっていた。『今更こんなものを贈って何になるのか』憂鬱な気持ちがよぎる・・・。明日野日出志はもういない。この女性が明日野の事故を知るのも時間の問題だ。もしカインがこの男に興味を持ったとしてもこの結果はなにも変わらなかったろう。この行為は無駄なんじゃないのか？』そう思ったカインだったが、突然マリアが光り輝いた。

「マリア！どうしたんだ・・・？」

不思議がったカインだがそのマリアの光と同じ色の光が内ポケットから見える。内ポケットからその光を放つあの明日野の箱を取り出す。ひしゃげた箱はまるで新品同様にどこにもしわもくずれもなくなっていた。ただ、一緒に入れていたはずのプロポーズのカードがなくなっていた。

「マリア・・・？どうして・・・」

マリアの復元能力で箱の外見（おそらく中身も）は元通りになった。きつと箱の中ものが破損しているのに気づいたマリアが勝手に能力を使って復元したようだ。一度使うと二十四時間は使えなくなってしまう貴重な能力だが時折、マリアはカインの意思とは関係なくその能力を勝手に使ってしまう。しかし、結果カインはその能力を使う気になるのであまりカインも気にしてないのだ。が、カインの疑問はその事ではなく、マリアがカードを消した事を不思議に思っていた。

能力を使い魔力の光が消えたマリアだが、今度は優しく淡いオレンジ色に輝き始めた。

「中に入れ、って事か・・・？」

カインはマリアと会話できるわけではないが、カインはマリアの気持ちや光によって感じるようになっていく。カインには今の光が「先に進みなさい」と言っているような気がしたようだ。

病室のドアの前に立つカインはそのドアに透けるように入る。殺風景な部屋の奥に一台のベッド。ベッドの横の台に置いてある時計は十時半を過ぎていた。いろいろあったがそんなに経っていないもんだな。カインはベッドの側までやってきたが女性は静かに寝息を立てている。起きていたのだろうベッドは傾斜がついていて、頭が上がっている。手には林檎が握られていた。が、それがどういう意図なのかカインには調べる術はない。カインは手にした箱をその林檎とすり変える。起きない、熟睡しているようだ。林檎を横の台に置く。その時カインはフと思いついた。

ポシェットから明日野の魂を丁寧に取り出し女性の顔の側に置いて

やる。明日野の魂はその魂独特の光をいつそう強くして輝き始めた。物理的な光ではないので彼女は起きる事はない。カインは明日野に最後の別れをさせてあげようと思った。人間が眠っているその側にその人物と縁のある物を近づけるとその人物の夢を見る。というのをどこかでカインは聞いたことがあるようでそれを実践しているだけだが、その真偽をカインも知らない。しかし、明日野の魂の輝きがその光を止めた時、

「さようなら・・・ひーさん・・・。」

女性の口から切ないくらい悲しい寝言が聞こえてきた。成功した・・・のか・・・？カインにとっても初めてのことだった、が、女性の頬を伝う涙が結論だと感じたカインは再び明日野の魂を

丁寧にポシエットに戻す。

「これで・・・いいんだな。」

言葉は明日野の魂に言ったのか、それともカインの中でまだ消えない憂鬱な疑問に言ったのか。それは解らないままだ。今後、この女性にどんな事があるのか？明日野の死をどう受け入れるのか？カインには、それを知る資格も必要もない。明日野に至ってはその術すらない。それでも明日野の魂はカインによって最期に女性に会えた。明日野の魂は満足しているのかもしれない。その魂の透き通る輝きがなによりの証拠なのだが、カインの気持ちには届いていないようである。

さつき人間界で終えた仕事をずっと考えていたカイン・・・。いつの間にか目の前の大きな川の流れを見えてないような目で眺めていた。ここがカインの歩いていた魔界の空間の最終地点。カインの前に広がる海のようなだが上手から下手へと流れている事で川だというのが解る。その流れの上をカインの持っている魂のような光の玉が、ゆっくり手前から対岸へと流れとは関係なく進んでいる。一つや二つではない。カインの足元からは少ないが遠くになるにつれ、数は多くなっている。その魂達も微妙に違いがあり、透き通った光

をした魂は真っ直ぐ進んでいるが、濁っていたり、光が弱弱しかったりする魂は、川の流れに逆らえず、ふらふらして他の魂にぶつかりそれら諸共川の中に沈んだり、浮かんだり沈んだりを繰り返し、最後には浮かんでこなかったりしている。魂の変える場所、三途の川である。別名でアケローン川とも呼ばれている。カインのいる側が冥界。川の対岸が霊界だという。川の下は直接地獄になっているらしい。死神の仕事は人間界で回収し終えた魂をここで霊界に渡す事で完了する。

「カロン・・・いいから出て来い。終わったから・・・。」

川に向かってそう言いながらポシエツトから明日野の魂を取り出す。すると今まで誰もいなかったカインの隣にカインの倍の身長はある老人が現れた。魂をその老人に差し出すカイン。老人は跪き手にした杖で魂をかけるように取り、顔の側まで持っていき、魂を品定めするように眺めだした。その様子を見ながらカインはまだ悩んでいた・・・。

『俺がしたおせっかいで明日野のためにあの女性は傷ついたんじゃないか。知った事ではないにせよ俺がしたことはあれでよかったのか？どう思う・・・？マリア。』

マリアに問うようにマリアに手をかざす。淋しげなその様子を見ているのはカロンだけ、とは限らない。カロンという老人は品定めを終えたようでゆっくりと明日野の魂をゆっくりと対岸に向け流そうとする。すると明日野の魂は再び強く輝きだした！カロンは再び顔の近くに魂を近づけ、まるで魂と話をするように耳を向けたり口を向けたりし始めた。カロンやこの川の管理をする悪魔達は魂の形となったものと会話できる特殊な力を持っている。一通りのやりとりの後、カロンはカインを見ながら大笑いする。カインは無言のまま見ていた。カロンは今度こそ明日野の魂を浮かべ、ゆっくり前に押すと、魂はゆっくりと、しかし堂々とした姿で静かに対岸に向けて進んでいった。明日野の魂がちゃんと進んでいる事を確認したカインはそのまま踵を返し、帰るため引き返そうとした。

「カイン、ちよつと、待てあの魂から言伝があるんだが……。」「
三步進んだ辺りで足が止まる。でも振り返らないカイン。

「プレゼントをありがとう。プロポーズできなかったけど最期に夢
の中で彼女に挨拶ができた。とても悲しいことだけど彼女を最後に
元気付ける事ができた気がする。これもあなたがいたからです。ふ
ふっ死神が感謝されるとはな……。なにをしたのか詮索せんがお前
は本当に変な死神よな……。」

「変な死神」。カインはそう呼ばれた事がなんだか、自分の明日野
にしたことに疑問を感じていた自分を納得させてくれたような気が
した。

「ははっ、全くだな。（明日野 日出志、今度生まれ変わったら頑
張れよ）」

それでも振り返らないカイン。捨てるように言葉を吐きつつも明日
野の魂に礼を言うつと、その場で一回伸びをして駆け出そうとする。

「待て待て！まだ終わつとらん！」

「つとあ！まだなにかあるのか？」

たまらず結局振り返ってしまったカイン。その目には少し涙が溜ま
っていた。その表情を見てカロンは微笑みながら、

「お前に、よろしく。だと。」

少しの間……。笑い出すカイン、だが涙は溢れてしまっている。

カインは涙を拭うと一際大きく伸びをして、

「さてつと！んじゃ、今回の始末書でも書きに行くかあ！！」

カロンはもういない。アケローン川の畔に一人、カインは元気よく
そう叫ぶと冥界に帰るためそのまま姿を消す。直後、その叫びに応
えるようにマリアの力強く優しい輝きがアケローン川を照らした。
川は静かに流れている。

（了）

アケローン川の畔で（後書き）

やっと終わることができました。文章力がなくせに話作ったから読んで欲しいという気持ちで出してしまい。それでも読んでいただいた方々には感謝してます。ありがとうございました。実はカインの話は、ここまで第一話でして……。頃合を見て第二話を執筆したいと思います。よかったらよろしく！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5841c/>

カインによろしく！

2010年10月8日14時18分発行